

鈴木勝忠校

江戸座御膳集

—

古典文庫

鈴木勝忠校

江戸座談集

古典文庫

古典文庫第二三八冊

昭和四十二年五月二十日印刷発行

(非売品)

編者 鈴木勝忠

一 発行者 吉田幸一

江戸座俳諧集

印刷者 東京都板橋区熊野町三四
帝都印刷製本株式会社

発行所 東京都(王子局区内)
北区西ヶ原三ノ三四

古典文庫

電話(九一九)二七一七
振替口座東京一四五九七番

凡 例

一、本書は「江戸座俳諧集」と題して、江戸座の享保期の連句集『後余花千二百句』『百千万』『続江戸筏』『太郎河』『落葉合』『紙蚕』の六部を集め、『園圃録』を附載翻刻し、四分冊に収めた。

一、本文はなるべく底本に忠実になるようにつとめたが、序跋などの行替は底本のまゝではない。

1、丁数は、裏移りは「 $\wedge$ 」 $\vee$ 、丁替りは「 $\wedge$ 」三ウ $\vee$ のように示した。

2、漢字かなの別はそのままとし、濁点及び句読点を加えるようなことはしなかった。ただし、漢字の字体は、現行のものに直したところがある。

一、解題は、むしろ、本文そのものが語ってくれると思うので、簡単な書誌のみを記し、四分冊の総名録を附して使用の便宜をはかった。不角派以外の享保俳人の大部分が見えると考えたからでもある。

一、解題は、「江戸座俳諧集」四分冊所収本のすべてを一括して収め、本書のはじ

めに掲げた。所収本の口絵も同時に掲げた。

昭和四十二年四月

鈴木勝忠

解題

1. 書誌

『後金花千二百句』

享保六年正月刊

大本二冊、沾徳評、吉田字白版。柱に「合歡堂」と入りその蔵版と見られる。正徳四年没の堵岩があり、二世としなければ、成立は古い。

岩瀬文庫、国会図書館蔵本によった。

『百千万』

享保十年十二月刊

大本三冊、沾洲編、沾徳序、青峨跋、吉田字白彫。興行一覧は(2)参照。
国会図書館蔵。

『続江戸筏』

享保十五年七月刊

半紙本二冊、沾洲評、青峨序、沾洲跋、万屋清兵衛版。
国会図書館、京大文学部蔵。

『太郎河』

享保十五年八月刊

半紙本二冊、午寂編、自序、野田太兵衛版。丁付なし。

愛知県立大学蔵。

『落葉合』

享保十六年十月序

半紙本一冊、超波編、自序、貞佐跋、奥付なし。

家蔵。

『紙蚕』

享保十八年九月刊

半紙本三冊、超波編、貞佐序、自跋。若菜屋小兵衛版。柱に連衆略号を一字ずつ添え、綴込みに丁付が隠れている。

愛知県立大学蔵。

『園圃録』

寛延元年十二月刊

大本二冊、尾谷編、自序、午寂跋。出雲寺和泉掾版。

刈谷市立図書館蔵。

2. 『百千万』興行年次表

享保 八・五・一六……沾洲会

〃 六・二〇……蘊里・初九会

〃 七・二——沾洲会

〃 七・一八……一漁会

〃 八・七……松春会

〃 八・一三……竹葉軒会

〃 一一・六……隣鐘居会

〃 一一・二〇……舟木会

享保 九・五・二〇……如蒿会

〃 六・一三……沾洲会

〃 六・一七……卜尺会

〃 六・二二……沾洲会

〃 六・二七……和推会

〃	〃	〃	〃	〃	享保一〇・	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
九・二六……同	七・一〇……石梁架会	六・一〇……晋如会	四・二一……竹止会	四・七……苔洲会	二・二〇……沾洲会	一一・二九……長水会	一一・二四……逸志会	一一・二……里々亭会	一〇・八……風葉会	八・二七……雀童会	七・二九……沾洲会	七・六……全史会	七・三……青峨会	
右														

他に、甲陽・京・河越・結城・水戸・秋田（二卷）の年次不明の巻あり。

3.

享保期の江戸座俳諧を、沾徳・沾洲らの洒落比喩体に対する、麦林又祇空の法師風による蕉風復興という五色墨・四時観派が構造図と考えられて来たが、『後余花』『百千万』さらに、享保末のいわゆる対立期を経過した『園圃録』をみても分るように、彼らは交友以上の親密さを示しているので、これは運動などというより、宗匠と俳諧師の意識のずれ——職業俳人と非点者の差異が指摘される程度のものであると考えられる。

そして、江戸座とは、このような流派という縦の別と、玄人、素人という横の差が混成した寄合の、点者側から企劃された職業安定のための方式なのである。『続江戸筏』竟宴の部に、沾洲とは別系統の湖十が、「年番」という肩書をつけて発句をものしている。年番とは、おそらく、宗匠組合の年行事の意味をもつであろう。宗匠組合の自衛と統一は、この年番の仕事にかかっていたと見てよい。

『綾錦』が、「末宗匠」とか「正宗匠」と記し、或は、五色墨や四時観連中を名録から除外したのもこのような意味だろうし、『鳥山彦』で「新宗匠」をかけた披露の時期を示しているのも、年番がこれを受付けたことを意味しよう。『五色墨』の点取否定なども、こうした勢力的な村八分待遇を裏返したものとして見るとき、全貌が明らかになるのではないか。さらに、このような宗匠組合意識が組織化されるのは、沾徳没後、沾洲を中心におしすめられたらしく、『百千万』『江戸筏』などの巻末に麗々しく掲げられる、纂輯資校・補助・資毫などの役割表のごときも、編集の組織化の表示にほかならず、享保をもって、江戸座結成期とすべきであろう。

後余花千二百句 上

後余花千二百句

比 叡

千哥はたち余花千
句竟宴の発句なり
ちうたはたまきな
つけて古今わかし
ふといふ古今序の
詞也
合歡は堂の名玉敷
むは挨拶の気味な
り堀江にも玉しか
ましを万葉

ひえもあれ千哥はたちの春の風
合歡に一筋玉敷ん落
蜜蜂の昼を淋しく松ふりて
尺八吹か豎しまを着る
丸熨斗の焙し戻りし雲の後
鐳のさやは中へはめられ

露江

沾徳

露沾

午寂

蘭水

白雲

長久は野口をしらぬ月の友

風葉

なつかしく見て綱掛こそくる

徳純

衣^ううつ大俎板もありかたや

昌貢

けふも城^き殿か通箱出る

琴風

相生の簪に提るかきつはた

雪凍

人こそしらね山椒のあと

岩翁

濁るものは降て地
となる

濁るもの降て眠れる太祝^{ノット}

眉丘

筆をわすれて中川へ来る

来枝

入狭山但馬

裾へ手は入るさの山の雲となり

楓子

缶^{ホトキ}をくほど菊に畝あり

波星

結繩ノ事文字の始
也

腰はりはいかなる縄を結ふ露

和推

宗祇筑波集竟宴
の百首の短冊此住
吉_ニ今_ニあり

月も周防のすみよしに澄

佳風

義によつて軽き目をひく司召

乱絮」上二ウ

笑ひのひゝく咆厨に

虎銀

小了簡広きかうへのはな心

其雫

きたなき柳ときに感応

賀燕

二
皺面は莫_ユ勤_メすな希の春の宵

椿子

ゆめはゆめくも也
ゆめ花ちるないや
おちに咲け万葉

卸か道に九折なし

沾化

源氏行幸巻にから
衣叉から衣唐衣

から衣紫鼻をつくく唐衣

一雲

れいせいふしの油手にあり

一和

細杖のたはむ程こそたはむらめ

松巴

鷺のすみかも清きひつすみ

徳宇

羽州秋田

埋てもいろはの里に土手をみる

半鱗」

撥も奥ある簪女の寒声

我常

瑠璃の色を云

笄は翡翠鰕の間也

青峩

染川を渡らむ人の
いかてかは伊勢物
語

豊後しほりに渡る染川

東水

執蓋行列の笠の役

執蓋に君はしらすやさんさ降

格枝

西瓜の立具水もあける

沽石

人界の甘い端なし風の月

喬谷

昇殿以後の厂そきこゆる

楓江

籠のすたりたるな^二
う

替る瀬の身を出しからと押やられ

叉魚

浅黄縮に袖の干加減

海宇

針筒の形也

針筒は早速直すときさ莉

因州鳥取

隣笛」上二ウ

恋のうへにて推量
する也

ひたき炬屋也

若き時の向ふ疵な
となるへし

附心はうすけれと
畢竟裸身にてはた
らく形をいふなり

起ていなんせ波の鼓と

知貞にとこやら足ぬ爪はつれ

宮をわたると湯とり食見る

結縁の地藏といふも水と影

問屋のほこり鎗を煙らす

十六夜や沙汰した疵も耄かゝり

はねて鱸も鯉桶の音

さはつたら身に入う迄角大師

古釈か出ては国恩も逡

華垣の庄は匂ふて蔵を抱

独活に枝さく二挺目の臘

秋色

百里

言求

沾節

沾岳

沾葉

釣玄

文東

和風

如蒿
」

朝松

こなたのは也
源氏にも出

雑役の仕手とりも
ち也源氏若菜にも
雑役し給ふとあり
御賀のとりもちな
り

三
フランダ

紅毛かかつらも東風になひく覽

こなたの御は密／＼の雛

優曇花は居風呂桶に肩を出す

当り月より雑役の仕手

乗合を諫かねたる内輪とも

古具足にも残る手爾於葉

今来んといひて噓サメ枇杷の花

七里の檳に素縫目せはき

夏は川月に異見の闇もなく

ちなみの膾いたゝいて出る

水筋の蟻の道くさ草の上

蘭臺

露清

壺月

湖十

沾宇

雨橘

仙里

羽光

林車
「上三ウ

参州
吉田

凍雲

望月